

『羊の歌』

加藤周一著／岩波新書

『続 羊の歌』

加藤周一著／岩波新書

この本の著者である加藤周一の名前を聞いたことのある20代の人はいくつかもいない。副題の「わが回想（すなわち著者の自伝）」がなければ、『羊の歌』だけではどんな本なのかさっぱり検討がつかないと思います。私自身もこの本を読むことがなければ、加藤周一という名前すら知らなかった可能性大です。20代半ばに血液学の専門家として原爆投下後の広島で調査にあたった人物が、その後文筆家（あるいは評論家？作家？）に転向したことを不思議に感じました。この本には、著者が幼少期から旧制高校、大学を経て医学に携わる過程で、どのように考えながら過ごして来たかが書かれています。大学入試を控えていた時に読んだ唯一の本で、それ以降は読み返した記憶がありません。今でも印象深く記憶に残っている本の一冊です。岩波新書というと堅苦しいイメージがありますが、20才前後の多感な時期に一読を勧めたい本です。

岩波新書は日中戦争下の1938年に創刊されました。創刊の辞は、道義の精神に則らない日本の行動を憂慮し、批判的精神と良心的行動の欠如を戒めつつ、現代人の現代的教養を刊行の目的とする、と謳っています（岩波新書のあとがきより）。堅苦しく感じる表現ですが、誰もが困難を覚える今日こそ、意識しなければならぬと強く感じます。

2008年に逝去するまで、加藤周一は朝日新聞に「夕陽妄語」（時事評論）を定期的に掲載していました。この題名は、「せきようもうご」と読むことを最近になって知りました。この評論は時機を得たすぐれた内容と感じました。しかし、自分にとっては悪夢の国語試験を思い起こす難解もしくは周りくどい文章表現に思いました。なぜこのような難解な文章で考え（意見）を表現するのか、私の国語力では残念ながらいまだに理解できません。インターネットで調べたところ、「夕陽妄語」は単行本（朝日選書）になっていました。他にも加藤周一が書いた本は書店で良く見かけます。手軽な文庫本では、「日本人とは何か」（講談社学術文庫）が良く購入されているようです。これらの本は、国語力だけでなく志操も高めることができる良書に思います。私自身もいつかは、ぜひ読みたいと考えています。

執筆者紹介

佐藤 一則

物質材料工学専攻教授。専門領域は、材料工学、無機・金属化学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『羊の歌』 加藤周一著 岩波書店（岩波新書）1968年 886円

『続 羊の歌』 加藤周一著 岩波書店（岩波新書）1968年 864円

『夕陽妄語 第1 - 3輯』 加藤周一著 朝日新聞社（朝日選書）1997年 品切

『日本人とは何か』 加藤周一著 講談社（講談社学術文庫）1976年 886円

[ブックガイド目次へ](#)